新吉は乘り込んだ。

糸崎行だつた。

糸崎で乘り換る爲に降りなければならない。

すると巡査が其處に待つてゐるだらうと云ふ氣がした。

尾ノ道に着いた。新吉は降りて了つた。

體は綿の如く疲れてゐる。

日は暮れて、雨催ひの空は押し潰されたやうに低く垂れてゐる。驛の前の宿屋へ行つて、遊廓は何の方面だと言つて聞いた。

可成遠方だ。

空地を走つて塀について曲つた。

暗い人影が新吉の後を追つて走つた。

頬かむりをしてゐる。

新吉はくるりと向きをかへて了つた。